



王宮の楽師——ジャワ島西部チルボンのスカテン

福岡 正太 民博文化資源研究センター

この王宮では楽師の舞台が衣装によって現出され、
衣装によって解体される。
楽師たちの制服がもつ力とは……。

スカテン初日

しばらく前から王宮の前庭は人でごったがえし、身動きをとることもできない。時計は夜の八時少し前を指している。係員がやつのことで道を作ると、王があらわれ、静かに楽器の前に陣取った。

八時。人びとが一齐に小銭を投げ込むと、喧噪のなか、演奏が始まった。スカテンとよばれる行事の実質的な幕開けだ。預言者ムハンマドの誕生日を記念しておこなわれる。スカテンという名称は、彼らが演奏する楽器の名、ゴン・スカティに由来している。一五世紀末、ジャワ島西部北海岸の町チルボンの王国を隆盛させたグヌンジャティ王は、この楽器を用いて、人びとをイスラム教に改宗させていったと信じられている。

楽師が身に着けているのは、タクワとよばれるつめえり風の上着、ブンドとよばれる帽子、それにロウケツ染めバティックの腰衣である。王宮に仕える者の正装だ。材質や仕立ての違い、豪華な装身具の有無はあるが、基本的に王族の正装もほぼ同じ構成である。王宮の伝統的な行事では、男性はたいいていこうした衣装に身を包む。

普段、このコーナーでは、制

服姿できりつと立つ人びとの写真がかかげられている。が、残念ながら今回は座っている姿の写真しかない。なかなか彼らがそろいの制服で立っている場面を見ることができないからだ。彼らは、演奏が終わると、その場で衣装を脱いでしまふ。下には普段着の洋服を着たままだ。

演奏モードの衣装

スカテンの楽師たちは、この日から五日間、一日七回、二〇時、一三時、三時、七時、一〇時半、一四時、一六時半に、それぞれ約一時間二〇分ほど

バティックを制服にする

スカテンでは、楽師のほかにもさまざまな役割を果たす人びとがいて、それぞれがそろいの衣装を身に着けている。そのなかには、バティック・シャツを制服としている人びともいる。この年は、場内整理係がバティックの制服を着ていたようだ。バティックは、二〇〇九年にユネスコの無形文化遺産のリストに記載された。そのころから、インドネシアではバティック着用運動も盛んになり、バティックを制服とすることが、ますます増えている。チルボンのバティックのモチーフとして有名なものは、メガムンドゥンとよばれる雲のデザインである。グヌンジャティ王の妃の一人が中国の人だったことにも象徴されるように、チルボンの王宮には中国に由来するものが多くみられる。メガムンドゥンはその代表的な例だろう。よく見ると、楽師の腰衣のバティックにもメガムンドゥンが描かれている。



演奏中の楽師たち。下には普段着を着ている



演奏が終わるとすぐに衣装を脱いで日常モードにもどる



スカテンのあいだ、演奏場所は楽師の生活の空間にもなる。楽師の家族は周りで露店を開いている



バティックシャツの制服を着用したスタッフ。
中国の雲の模様を取り入れたバティックがチルボンの特徴のひとつ



ゴン・スカティを清める。
演奏時とは異なる制服を着用している